

ニューヨークタイムス 世界で最も影響力のある 100 人 菅野武先生のスピーチ

2011 年 10 月 15 日 ホームカミングデー
土樋キャンパス ラーハウザー礼拝堂

皆さんこんにちは、ご紹介いただきました菅野武です。
今日のホームカミングデーにお招きいただきましてありがとうございます。
私自身、中学高校と学院に学び、幸い大過なく学院生活を過ごすことができました。6 年間にわたって毎朝の礼拝によって聖書の言葉にふれることができたのは、私自身の精神教育にとって大きな影響があったことを実感しています。

私は大学で医療を学んだあと、地域医療をやりたいと思いました。最初は仙台でしたが、その後へき地医療に携わることになりました。

私はこの 2 年間、南三陸町の公立志津川病院で内科医として勤務しておりました。

3 月 11 日、あの時は院内におりました。大きな地震がおきて、訓練では 3 階に避難することになっていましたが、最上階の 5 階に移動している最中に、地震から 30 分で津波が襲ってきました。濁流が松林を超えたと思ったら、あっという間に町をのみ込みながら押し寄せてまいりまして、4 階の途中まで一気にのみ込まれた光景は決して忘れることはできません。たくさんの方たちと病院のスタッフ、住んでいた町のすべてがのみ込まれていきました。

初めは絶望感と無力感にうちひしがれておりましたが、目の前に助けなければならない患者さんたち、自分より弱い人たちがいることが、逆に私たちを支えてくれたと思い

ます。

できることはわずかしかなかったのですが、寄り添い、一緒に過ごすという中で、助けられるまでの3日間を過ごしておりました。

3日目に最後の救助ヘリで助けられて、その3日後に私に長男が授かりました。その様子がニュースなどで流れたことで、アメリカのタイム社が注目したわけですが、実際には私自身が特別だということではなくて、日本全国で同じような思いをされている人がたくさんいることも理解しております。

救出されてから1週間ほどで南三陸に戻りまして、そこから仮設診療所の運営が始まるまでの約1ヵ月間、もう一人の常勤のイシザワ先生と共に主にマネジメント業務ですが医療活動を展開していました。

それが一段落して仙台に戻った時にタイム社から連絡を受けまして、「世界で最も影響力のある百人」の一人に選ばれたと。最初はとてもびっくりしました。困惑したと同時に、ニューヨークで開かれるレセプションパーティに参加してほしいという依頼があり、最初は断ろうと思っていました。ただ、一緒に働いたイシザワ先生や今お世話になっている東北大学消化器内科の先生に「どうしましょう」と相談したところ、「被災地でしか伝えられない思いがあるから、ぜひ行ってきなさい」という後押しをいただいて、ニューヨークに行かせていただきました。

そこで、私のつたない英語で伝えたかったことは大きくふたつあります。私自身が百人の一人に選ばれたことは大変光栄に思いますが、今回の受賞は私個人の業績ではなくて、東日本大震災におけるすべての被災者の不断の闘いへの受賞であると理解しているということと、私をはじめ、被災しながらも闘っている日本人がたくさんいて、そんな

日本を私は誇りに思うし、日本人は必ず蘇るのでみていてほしいということを繰り返し伝えてまいりました。

そうした経緯で今回同窓生代表ということでお話しただいたのですが、私自身死の淵にあって思ったことで一番大きなことは、本当に目の前に死が近づいた時は、走馬灯のように、というようなことはなくて、不思議なもので、残された家族のために自分は何ができるかという思いがよぎりました。そう思った時に、自分に課せられた使命を一生懸命果たすことが、残された人たちに少しでも伝えられることではないかと感じて、できる限りの医療活動をやったことを覚えています。

今回の震災で亡くなられた方々を忘れることは、いまだにできません。つい先日も合同慰霊祭の時に南三陸に足を運びましたけれど、やはり誰一人として明るい表情で、もちろん当然のことですけれど、笑って過ごせるようなそんな元気を誰も持っていないんですね。けれども、亡くなられた人々を悼む気持ちを大切にするからこそ、私たちは前向き進めるのだと思います。

私のような若輩者がこのような席上でお話しさせていただくのは大変心苦しいのですが、人というのは、明日への希望、亡くなった方たちへの思いというものを大切にすることで、今日を強く生きられるのだらうと思います。

この度はホームカミングデーにご参加の皆さまと共にこの場集えたことを神に感謝いたします。